

まあ、皆、笑う。

しかし、僕の心の中には、口には出さなかったが、「これが何でだらしないんだろうか、能率的で、合理的なのに。」と、疑問は、今も残る。

片岡が、あの子によく似た感じの写真を表紙にした雑誌を、一時間目の社会の授業が始まる少し前に、僕に見せた。

社会の時間、先生は演説一筋。僕は、その雑誌を借りて、机の下に隠してじっと その雑誌の表紙を見つめる。

石井、臼井、井上、森やらも、ジロジロ、中田が けらけら 笑いよる。

それから、二時間目終了後から、六時間目の技術まで僕は片岡にゆずってくれと、ねばりにねばって、強く頼んだら、片岡は、

「お前、そんなにほれてんのか。」

「だいぶ、この写真を 気に入ったようやなあ。よしや。」と言って、

ただで やると 約束してくれた。

放課後、掃除がすみ、すぐ下校。

帰りの道で、芦田と一緒になる。

頭に浮かべながら眠る